

「ふれあいの先に見えたもの～子どもが高齢者の心を動かした！～」

社会福祉法人鳥取福祉会 アクティブ津ノ井

- 発表者名 介護福祉士 宮脇 真美
- 共同研究者名 看護師 谷尾 美貴恵
山名 紀子

1. 問題提起

アクティブ津ノ井は機能訓練型のデイサービス（通常規模）として平成28年1月に開設された。

近年、核家族化が進み老々世帯や独居老人問題が深刻化していることに伴い、世代間の交流が注目されている。アクティブ津ノ井（以下アクティブと表現）は同法人が運営している津ノ井保育園の老朽化に伴う新築移転と合わせ、保育園と同一建屋で建設された幼老複合施設である。

子どもと高齢者が互いにふれあうことは、「子どもたちにお年寄りをいたわる気持ちが育まれ、思いやりやマナーが身につく。高齢者は自分の役割を見つけ、活力が高まる。」などの様々なメリットがあるということは知られている。初年度は定期的な保育園行事に合わせて交流を行ったが、これは併設でなくても出来ることではないか？との疑問があり、せっかく高齢者と子どもが同じ建物で過ごしている環境を十分に活かせる方法の検討が必要と感じた。

2. 目的

保育園とアクティブは廊下でつながっており行き来ができる。また、園庭に面したデイルームでは運動をしながら子どもたちの遊ぶ姿を見ることが出来る。利用者は窓越しに子どもを見ているだけでも和やかな表情をされるが、声をかけていいのか迷う様子が見られた。子どもたちがデイルームに入ってきてても保育士に遠慮や迷いがありすぐに呼びに来る姿も見受けられた。



気軽に声をかけたり遊んだりしたい、もっと利用者の笑顔が見たいと考えた。保育園との行事ごとの交流ではなく、アクティブでの生活の中に子どもの声や姿があり、一緒に遊び同じ空間で自然に過ごせる日常的なふれあいを目指した。

3. 方法

＜開設当初からの交流＞

- ◇ 保育園の行事に参加（ミニ運動会・七夕会・ポニーふれあい体験・ごっこ遊びなど）
- ◇ デイルームでコマ回し大会
- ◇ 卒園児に手作り作品をプレゼント

<具体的な取り組み>

- ① アンケート実施（双方の職員に同じ内容で実施、問題点の抽出と意識の確認）
- ② アンケートの結果を基に検討（保育士と課題や今後のふれあいについて検討）
- ③ 検討事項をもとに日常的なふれあいの実践
- ④ 実践後（半年後）再アンケート（同内容）実施、結果の分析

<具体的な取り組み① アンケート実施>

目的：保育園・アクティブ職員が、交流についてどう思っているのかを確認する
問題点の抽出

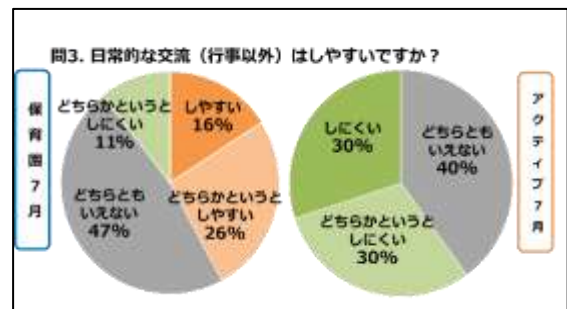
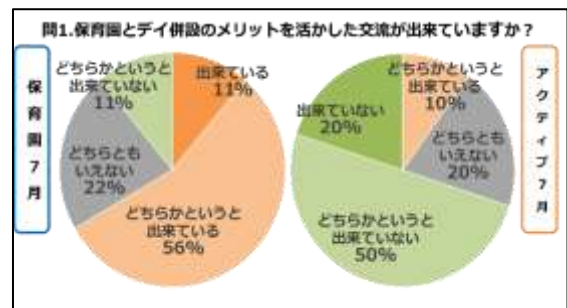
アンケート内容
選択回答
1. 併設施設のメリットを活かした交流ができていますか？
2. 日常的な交流（行事以外）はできていますか？
3. 日常的な交流（行事以外）はしやすいですか？
自由記載
4. 高齢者と子どものふれあい（交流）について
5. 職員名をご存知ですか？名字だけでも書いてください

○アンケート結果

問1の回答を見ると、保育園は交流が「できている・どちらかというと出来ている」が67%であったがアクティブは10%であった。世代間交流は保育園では行事と共にやってきた事であり、その対象が近くにいるため今までより交流の機会があると感じているのではないかと考えられた。

また、問3に対しアクティブの職員は「どちらかというと…」を含めても「しやすい」と答えた職員はいなかった。

自由記載等から、交流自体は双方とも肯定的にとらえているが、目指す「交流の形」がうまく共有されていないことが分かった。また、感染症が入った時の事や、子どもが走り回り高齢者が転倒する可能性、子どもの所在確認などの心配や、お互いの一日の過ごし方を知らないため、交流のタイミングを探っている事などが分かった。そして何より同じ法人職員ではあるが、介護部・保育部に分かれているため、双方の職員の名前などあまり知らないという事実に気づいた。



<具体的な取り組み② アンケート結果を基に検討>

- 「自然なふれあいを目指す」ことの確認
- 保育士もアクティブ職員も通常の業務等で多忙である。計画に沿った「ふれあい」ではなく空いた時間で無理のないふれあいをすることを確認
- 普段は廊下扉を開けて行き来しやすくする
- 感染症が発生した場合発生状況を報告し合う。状況により交流中止し廊下扉を閉める

- 子どもとの約束（走らない・先生に声をかけてからくる等）をし、安全対策に努める
- 食物アレルギー児や支援の必要な子どもの把握
- 月間予定の交換、一日のスケジュール確認
- 写真入りの職員紹介を作る、職員同士の懇親会開催

<具体的な取り組み③ 検討事項を基に実践>

随時開催の担当者会

おやつ共食・おやつ後のお楽しみ（ジェンガ・トランプ・将棋など）

- ◇ 利用者が子どもに積極的に話しかける場面が増える
- ◇ 「子どもを4人も育てたのに扱い方忘れたわ」と笑顔で話された



お昼寝トントン（未満児の寝かしつけ）

- ◇ 「おばあちゃんと寝たい」と子どもが楽しみにするようになる
- ◇ 「あ～何十年ぶりだろう～」と感慨深く昔の子育てを懐かしむ姿が見られる

郵便ごっこ遊び（感染症流行時）

- ◇ 「おじいちゃん、おばあちゃんの名前を覚えてい！」と子どもたちからのリクエストがきた
- ◇ 希望者の顔写真入りポスターを作成すると宛名入りのハガキが届き楽しみも増大した
- ◇ 「このハガキを書いてくれた子に会いたい」と子どもたちが来るのを心待ちにされる



職員紹介の作成・懇親会の実施

4. 成果・課題

<利用者の変化～アクティブで～>

80代 女性 要介護1 アルツハイマー型認知症 日常生活自立度 III a 元教員

- 「どうして私の事を知っているの？」と怪訝そうな表情をし、教員だったことをかたくなに隠そうとする
- 行事等で保育園に行くことを誘っても断られ、子どもとも関わろうとしない
- 午後になると「いつ帰れるの？」とソワソワ、玄関先でうろうろされる



- 子どもたちに「よくできたわね～」「はーい、集まって～静かに！」など先生のような態度で接することも増え、「私もこんな仕事をしていたからね～」と教員であったことを隠されなくなる
 - 書字等も拒否されていたが、お願いすると昼食メニューなどボードに書いてくださるようになる
 - 送りの時間まで落ち着いて過ごせるようになる
- 様々な面で認知症状は進んでいるが、アクティブで安心して過ごせるようになる。

<利用者の変化～アクティブで・自宅で～>

80代 女性 要介護1 アルツハイマー型認知症 日常生活自立度 II b 自営業

- 家ではお金を燃やす等の行動あり
- 仕事で熨斗紙を書いていたため、訓練として書字を勧めるが、「もう書くことはやめました」と拒否、手が震えて上手に書けなくなっていることを気にしておられる様子



- お金を燃やすことはなくなった（ノートなど他のものは燃やす）
- 郵便ごっこに誘うと「なんて書こう！」と積極的にハガキを書かれる。
- 自宅でカレンダーを切って自作のハガキを作り持参された
- 昼食メニューや活動内容など簡単な日記を書くことが出来るようになった



ふれあいをきっかけに書字訓練が進んだ

<利用者の変化～自宅で～>

70代 男性 要支援2 脳出血後遺症による右片麻痺 失語症 認知症状なし

- 小説を読んで過ごす事が日課
- 失語症の為話しづらさがあり、思うように言葉が出ないと話すことをあきらめてしまう
- 家族との会話も少ない
- 他保育園に通っている同居の孫と遊ぶこともほとんどない



- 家族との会話が増える
- 何度聞き返しても聞き取れるまで話してくれるようになる
- 家で孫のままごと相手をするようになった
- 孫の保育園行事に参加するようになった
- 「孫と一緒に風呂に入り体を洗ってあげた」と嬉しそうに報告された

アクティブから積極的に保育園の子どもたちと戯れることはないが、子どもが近くにいる環境が心に変化をもたらしたのではないかと推察される

<利用者への影響>

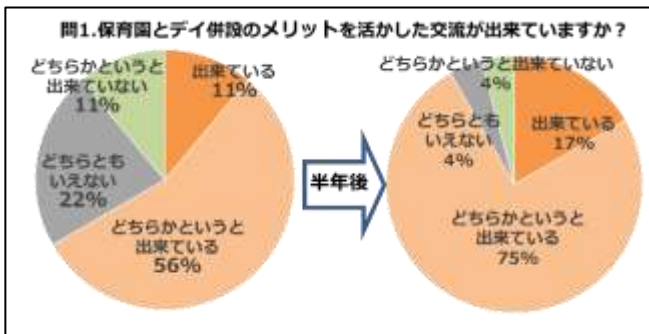
「僕が守ってあげるけ～滑ってみんさい」と子どもに促され、「70年ぶりに滑り台を滑った」と喜ぶ方、「子どもにできるなら私もできるかな？」とポニーに乗馬される方など、多くの利用者がびっくりするほど積極的に活動されるようになった。また、「見とるだけのおもしろいな～」と遠くから眺めるだけの方もあり、ご利用者によって反応は様々である。



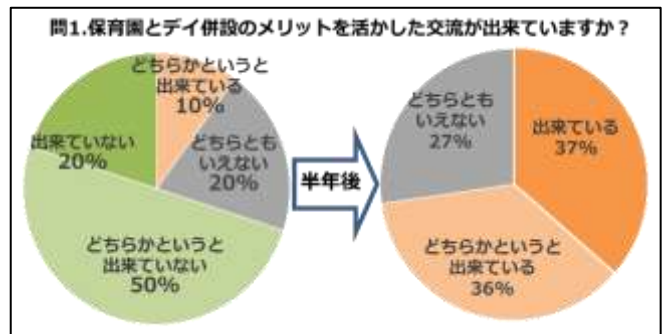
<再アンケート結果>

気持ちの変化

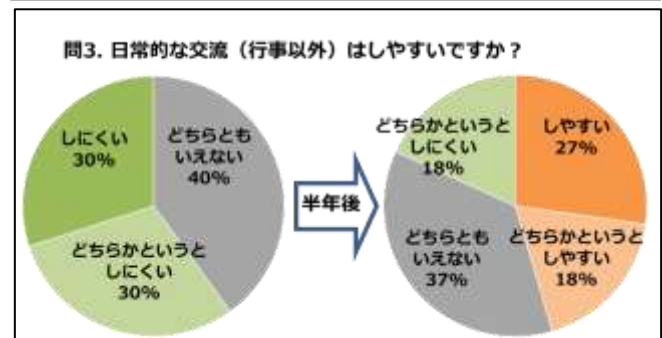
保育園



アクティブ



- 保育園・アクティブともに「併設のメリットを活かした交流ができています」との回答が増えた
- 「日常的な交流はしやすいですか」のアクティブの回答が0%から45%まで上がった
- ◎ 話し合いをすることで目指す方向が明確になり、職員同士お互いの信頼関係が生まれた



<今後の課題>

このふれあいを継続していくためにも介護士は子ども、保育士は高齢者へのかかわり方を学んでいく必要がある。また子どもが苦手な方、ゆっくり過ごしたい方への配慮を忘れない事が重要である。

お昼寝トントンの写真をホームページで見たデイ利用者家族から「感動した！」とお礼の電話を頂くなど、活動状況を紹介することで『併設施設である事』が浸透してきており、アクティブの利用や保育園の入所申し込みの選択理由に挙がってきた。広報活動を継続・拡大していく事も課題の一つである。

そして何より、子どもとのふれあいを通所介護計画書にいかにか反映させていくかが今後の大きな課題である。

5. まとめ

アクティブでは、利用者が抱えている生活のしづらさを受け入れたうえで、いかに在宅生活を継続していくかという点で支援している。それは、身体機能・認知機能・家庭の事情と様々だが、認知症の方にとって子どもとふれあえるアクティブでの時間は

印象のあるものとなり、安心して過ごして頂ける場所となった。また、認知症状のない利用者



にとっても良い刺激となり「元気で頑張ろう」といった活力に繋がっている。これらが在宅生活に与える影響については、これからも注目していかなければならない。

私たちは、「保育園と併設」という恵まれた環境を与えられた。この環境を活かし子どもとふれあう事を楽しみの一つとして元気に通って頂けるようサービスを提供していきたい。



本文中に掲載している写真は全てご本人の了解を得ている